

## 「千都の杜」は「兵どもが夢の跡」—補遺（続）

副会長・藤井正樹

これまでお付き合いいただいた拙文は、幻の山城を巡って「戦死者がゴロゴロ」などと殺伐で雅味のないものだったことから、お口直しに何か書けないものかと思案した挙句、文芸家の雅文ならその効果が期待できるだろうと考え、著名な文芸家の筆端に上った南多摩地方の風致について紹介して筆を擱くこととした。そこでタイトルからは脱線するが「兵ども」には別れを告げて、まずは佐藤春夫の出世作『田園の憂鬱』（大正6年発表）から引いてみる。大正5年に住んだ神奈川県都築郡中里村字鉄（現横浜市青葉区鉄町）でのことを回想したものであり、文中の「此処」「其処」について「T（東京）とY（横浜）とH（八王子）との大きな都市をすぐ六七里の隣り」と続けているが、このトライアングルをズームアップすれば能ヶ谷の景も見えてくる。とまれ、百年近く遡るが南多摩の丘陵地帯の原風景をスケッチした散文詩風の1文である。

「広い武蔵野が既にその南端になって尽きるところ、それが漸くに山国の地勢に入ろうとする変化 — 言わば山国からの微かな余情を湛えたエピロオグであり、やがて大きな野原への波打つプロオグでもあるこれ等の小さな丘は、目のとどくかぎり、此処にも其処にも起伏して、それが形造るつまらぬ風景の間を縫うて、一筋の平坦な街道が東から西へ、また別の街道が北から南へ通じているあたりに、その道に沿うて一つの草深い農村があり、幾つかの卑下（へりくだ）った草屋根があった。」

また、河上徹太郎（日本芸術院会員・文化功労者）著『エピキュールの丘』（昭和31年刊）所載の「都築ヶ岡の風物」に次のようにみえている。都築ヶ岡とは多摩丘陵の古称だそうで、この丘陵地を銃獵（鳥獵）の獵場として逍遙した獵人の眼に映った風致である。「渦を巻いたやうな丘陵の中にも、強ひて迎れば尾根といへるものがある。

小田急とほぼ並行して四キロばかり北に厚木街道（鶴川街道の町田調布線か）が走つてゐるが、その南側の尾根が大体こゝいらの主脈である。それから直角にいくつかの支脈が小田急の線路の方へ流れてゐる。厚木街道は鶴川の奥でこの主脈を横切るのだが、この主脈を縦走すると、南の方が大げさにいへば遥か海岸線までムクムクと雲が湧いたやうに紺青の丘が連つてゐる。それに緩勾配の所はよく開墾されてゐて、雑木林と畑とが美しく配合されてゐる。特になだらかな所は、南仏か中部イングランドのやうな感じが出てゐるのも一寸珍しい風景だ。」

昭和20年5月の空襲のため東京・五反田を焼け出された河上氏は、能ヶ谷の白洲次郎・正子邸に寄寓したのち22年11月に柿生（現・麻生区白鳥）に終の栖をトし、当地に関する多くのエッセイを遺しているが、柿生を記して最も著名な文芸家と云えば昭和10年に当地を訪れて40首余の歌を詠んだ北原白秋であろう。その1首「柿生」の「げに柿生、屋群（やむら）柿植ゑ、老柿は屋群さし蔽（おお）ふ。年いよよ柿は神さび、うやうやし人はものいふ。この柿や朱（あけ）の豆柿、垣内（かきつ）にも庭にも外（と）にも、道べにも丘にも野にも、照る玉と綴る山柿、柿生はよしも」（部分）から芭蕉の「里古（ふ）りて柿の木もたぬ家もなし」を想起する私は、以下、俳人の詩囊から柿を拝借して『田園の憂鬱』の無機質な描写に添えてみよう。

まずは久保田万太郎の「某日、小田急線「柿生」といふところにて下車。…河上徹太郎を訪ねんとてなり」と前書のある句（昭和24年吟）である。

七時まだ日の落ちきらず柿若葉

また「柿生の里も夏時間なり」と前書のある次句もこの時の吟であろう。

五時といふにまだ四時前や柿若葉

また、河上氏の周旋によって昭和21年1月に東京・三田から能ヶ谷に移住した石川桂郎に次の句（昭和29年・33年吟）がある。

東京に住む日のありや木守（きもり）柿

木守柿一枝を影の石蹴り図

石川邸にも亭々たる柿の古木が屋根を覆うように稜々たる枝を張っていたそうだが、その石川氏に師事した神蔵器が句集『木守(きまもり)』(平成5年刊)の跋に次のように記している。師弟にとって木守柿は古里を思い出す懐かしい原風景だったとみえるが、能ヶ谷の景には柿若葉より木守柿が似合うのかもしれない。

「私の故郷能ヶ谷は禅寺丸柿の産地であった。(略)特に能ヶ谷は地味によく合ったのか、柿生をしのぐほど盛んで、どの農家にも屋敷内に二抱え、三抱えもある大きな柿の木が何本もあって、その家の格式威容を誇っていた。(略)能ヶ谷に生れ育った私は、よく晴れた真っ青の天に浮かぶ木守柿の美しさ、とりわけひとしきり鶉(ひよどり)の啼き叫ぶ声のあった後の静寂、夕日に映える木守柿は、私のふるさとそのものであり、心の原風景としていつもなつかしく、あかあかと映えている。」

柿生村は市町村制が施行された明治22年に近郷10か村が合併して誕生し、万葉の昔から麻の産地であった麻生の古称に、鎌倉期に王禅寺の僧が村内で発見したと伝える禅寺丸柿を合わせて命名されたことから、柿生だけが柿の産地であるような印象を与えているが、同じ年に能ヶ谷など8か村が合併して鶴見川から名をとった鶴川村もまた柿の産地だったのである。

さて、そろそろ紙幅も尽きそうなので、最後に白洲正子の『韋駄天夫人』(昭和32年刊)所載の「木まもり」から引いて能ヶ谷の景としてのスケッチを完成させることとする。「私の住んでいる村は、近くに柿生という名称もあるくらい、柿の木の多い所である。秋も末になり、葉も落ち、実もとりつくされた頃、ふと見上げるとあらわになった木の天辺にとり残された柿が一つ、真赤に熟れている。(略)実はこの柿は忘れられたのではない、木まもりといって、全部とりつくした後に一つだけ残しておくのである。(略)それは、自然に対する一種の礼節ともみられるし、また、あの枝ぶりは面白いがごつごつした柿の木が、実も葉もふるい落したあとはさぞかし淋しかろうと、想像した人間の優しい思いやりのようにもみえる。案外、それは都会人の感傷で、来年はもっとならしてくれというおまじないかも知れない。そんなことはどちらでもよい。ただ寂寥とした景色の中に、小さな木の実がぽつねんと空を眺めている、そういう姿が私の心をひくのである。」

木守とは来季の豊作への願いを託して枝に採り残した果実のことで、白洲氏の云う「おまじない」の意味があるそうである。その木守への願いは、前回にも書いた柿生駅近くの題目塔(能ヶ谷など武相6カ村が寛政11年<1799>に建立)に刻まれた「天下泰平五穀成就」や、能ヶ谷神社参道の地神塔(文久元年<1861>に建立)に刻まれた「天下泰平五穀豊饒(穰)」の願文に通じるものがあり、「五穀」を穀物・野菜・果物・魚・肉の「五食」に置き換えれば、3. 11以後の苦難が続く今日、一層切実な願いなのである。(了)

